

学位授与番号：乙 3 1 3 5 号

氏 名：大久保 菜奈子

学位の種類：博士（医学）

学位授与日付：平成 28 年 1 月 13 日

学位論文名：
思春期のうつ病エピソードからの回復過程

主論文名：
思春期のうつ病エピソードからの回復過程

学位審査委員長：教授 井田博幸

学位審査委員：教授 岩楯公晴 教授 宮田久嗣

論文要旨

論文提出者名	大久保 菜奈子	指導教授名	中山 和彦 先生
--------	---------	-------	----------

主論文題名 思春期のうつ病エピソードからの回復過程

石山（大久保）菜奈子. 思春期青年期精神医学 2015 ; 25 (1) : 74 - 86.

回復する力、苦難に耐えて自分自身を修復する力のことを「レジリエンス」と呼び、うつ病の回復にもこの「レジリエンス」は重要な意味を持つ。本研究は特別な精神療法に焦点を当てたのではなく、医師の診察、家族の関わり、患者自身の中に回復力があると考えられ、患者の主観的体験から思春期のうつ病エピソードからの回復過程を捉えることであった。

対象者は児童精神科外来に通院する 13 歳から 18 歳の患者で初診時、大うつ病エピソードと診断され、現在は回復状態にある 16 名であった。調査は面接記録をデータ化し、グランデッド・セオリーに基づく質的研究法を用いて分析した。

結果は以下のことが挙げられた。

1. 回復の契機として多くあげられたものは、「家族のサポート・理解（初期から中期）」「薬の効果（初期）」「友人のサポート・導き（中期から後期）」「進路の相談・決定（後期）」「好きな事をする（中期）」「学校を休む（初期）」「主治医に話す（中期から後期）」「身近な人に話す（初期）」「共通の趣味について話す（後期）」であった。
2. 思春期患者の回復過程の特徴として、①話すことによる自己表現が大切、②家族のサポートが大きい、③対人関係（仲間意識）の重要性、④進路の決定の効果が挙げられた。

本研究から特別な事ではない、日常の些細な事や何気ない一言や医師の助言などが回復の契機につながる事が分かった。また患者自身もうつ病から回復するために様々な行動をとっており、患者の中に回復の力が存在している事も明らかとなった。患者の中にある回復の芽を見つけ、引き出すような精神療法に役立て、再発予防のためにも薬物療法だけでなく、限られた時間の中でも精神療法を併用していくことが重要である。

論文審査の結果の要旨

大久保菜奈子氏の学位論文は主論文1編、副論文5編からなり、主論文は「思春期のうつ病エピソードからの回復過程」と題する和文論文で、精神医学講座担当教授である中山和彦教授、第三病院病院長・森田療法センター長である中村敬教授の指導により作成された。以下、学位論文の要旨と審査結果について記載する。

思春期うつ病は有病率が1から7%と報告されており、治療法としては精神療法・薬物療法が行なわれている。人間の回復する力を“レジリエンス”と呼び、精神療法においてこの回復過程を理解する事は治療を行なう上で重要な意味を持つ。大久保氏は思春期のうつ病からの回復過程を解析し、その有効な精神療法を構築するため本研究を行なった。

対象はDMS-IVの診断基準に基づき、大うつ病エピソードと診断され、少なくとも3ヶ月間回復した状態にある13歳から18歳の思春期うつ病16例である。データは質的研究法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて面接により収集した。

本研究の結果、思春期うつ病患者の回復過程の特徴として

- 1、 話す事による自己表現の大切さ
- 2、 家族のサポートの大きさ
- 3、 対人関係の重要性
- 4、 進路決定の効果

という結論が得られた。

平成27年12月11日、岩楯公晴教授、宮田久嗣教授のご臨席のもと、公開学位審査会を開催し、大久保氏の研究概要の発表に引き続き、口頭試験を行なった。

席上、

- 1、 面接の具体的方法
- 2、 この研究の新規性
- 3、 成人うつ病との相違
- 4、 グラウンデッド・セオリーの欠点・利点
- 5、 本研究対象の重症度
- 6、 思春期うつ病に有効な薬剤名

7、 併存疾患の有無の影響

8、 病期分類の定義

などに関して質疑応答があった。

その後、岩楯教授、宮田教授と審議した結果、本論文は思春期うつ病エピソードからの回復過程について、回復した子どもから半構造面接により回復の契機を聴取・解析し、治療における回復の芽を見つけて行こうとする取り組みは独創的であり、うつ病治療に当事者の視点を加えようとする点で新規性を認める事から学位申請論文として十分な価値あると認めました。